# トリックアート

虹雪まい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トリックアート

【Ｎコード】
Ｎ６６９４Ｖ

【作者名】
虹雪まい

【あらすじ】
やめてくれ・・・消えてくれ・・・頼むから・・・頼むから・・・！

カチカチと響くマウスの音。外から微かに聞こえる虫のさざめき。左手に持つアニメキャラクターの団扇で自らをあおぎながら、拓海は最近小遣いを貯めて買ったノートパソコンのディスプレイを眺めていた。

「へぇ。まろんちゃん結婚すんのかあ。…げ、相手柔道の金澤！？うわあ…ショック…。」

ネットニュースに一喜一憂し、好きな歌手の公式サイトを巡り、好きな漫画やアニメの情報を探して、二次創作サイトを物色、と、毎日三時間はパソコンの前に座っている。
家族との共用のデスクトップパソコンを使っていたころは行けなかったエロサイトだって見放題なのだから、健全な男子高校生がネットサーフィンにはまらない理由はないだろう。

「んお、ショウからメールだ。…今日はＵＲＬが三つ、か。」

ニュースを大体読み終えてメールボックスを開くと、クラスメートからメールが入っていた。
差出人の彰二は拓海の１０年来の友人で、拓海なんかよりかなり年期の入ったネットオタク。よって、時々オススメのサイトを見つけては、こうして拓海に教えてくれるのである。おかげで、拓海のブラウザのお気に入り欄の項目は増える一方だ。

「またＵＲＬだけかよ…せめてサイト名くらいつけてくれよな…」

一つ目、大好きなアイドル、まろんちゃんの水着画像スレ。写真集撮影時のポロリ画像と称した写真に興奮。・・・明らかに合成だがそんなことはどうだっていい。
二つ目、成年誌の違法コピーサイト。ちなみに、クリックしたら既にサイトは消えてしまっていた。まあ、違法サイトは見るのに罪悪感を覚えるからいいや、と、三つ目へ。

…と。

「うわっ！」

クリックと同時、キャー、と甲高い子供の悲鳴と共に画面一杯に現れた、血みどろの女性の顔。また、それが静止画でなく、微妙に動いているのが気持ち悪い。

「びっくりしたぁ…なんだよぉ…」

誰が見ているわけでもないのだが、彰二の策略にはまったのが恥ずかしくて、照れ隠しにつぶやく。
拓海は特別怖がりというわけではないが、絶叫とグロテスクな顔面のインパクトに、流石にゾクッとした。
しかし、よく見るとちゃっちいページである。まだ心臓はバクバク言っているが、拓海は割と落ち着いてブラウザを閉じた。アクセス履歴は、しばらく見ないことにしようと心に決めて。

「えっと…ショウは…ログインしてるな。通話、通話。」

それから、無料通話を売りにするコミュニケーションアプリを開く。
彰二はいつも通り、深夜にもかかわらずログインしていた。
ヘッドセットを装着し、拓海は通話ボタンをクリックする。少し間

があって、楽しそうないたずらっぽい声が耳に届いた。

「絶対連絡あると思ってたっ。面白かったろ、特に最後のやつ！」

「ふざけんな！人の寿命縮めて楽しいか！」

もしもこの会話が文字で交わされていたら、『w』のオンパレードであろう口調の彰二に、拓海は一喝してから息をつく。彰二はまだ微妙に声に笑いを残しながら続けた。

「そう怒るなって。お詫び用意したからさ、」

「詫び？」

「タクの好きなやつ。」

カチカチ、と、彰二がマウスをクリックする音が聞こえてくる。

「また変なドッキリじゃねーだろうな・・・」

「大丈夫だって。一日に二回もやったら驚きも薄れるだろ？そんなつまんないことしねえよ。・・・送信、っと！」

んじゃあもう寝るから、と、彰二は早々と通話を切った。拓海が声をかけるも、既に回線は完全に切れてしまっている。しかも、すぐにログアウトしていった。

「・・・感想は明日学校で、ってか。ホントに変なサイトじゃねえんだろうな・・・」

ちらり、拓海は時計を見遣る。針は一時を指しているが、明日は一学期の最終日で午前授業。まあいいか、と、メールボックスを開いた。

彰二の言うとおり、新着メールが一件。メールを確認した拓海の顔

は、ぱっと明るくなった。
先ほどとは違って、ＵＲＬの一行上に【だまし絵スレ】とサイト名が記載されている。拓海は電車で片道４時間もかかるトリックアート専門の美術館に、毎年通う程のだまし絵好きで、彰二もそれを知っていたのだ。
拓海にとってだまし絵は『生』で見るものなので、ネットで検索をかけたことはなかった。わくわく、と、ページを開くと、いつも見ているようなスレまとめサイトだ。美術館で見た事がある作品もあれば、動画だからこそ面白いのであろう動くトリックアートも掲載されている。
ある程度進めていくと、何か良く解からない画像にぶつかった。黒字に白で、意味があるのか無いのかよくわからない記号らしきものが描かれている。拓海は色々な角度からそれを眺めてみたが。錯覚等を利用したものではなさそうだ。
ふと、画像の中心に点があるのに気付く。暫く考え込んだが、画像が切り替わるようなこともないし、と、つまらなく思って拓海はブラウザを閉じた。もう三十分もたっている。そろそろ床に着かねば、と、思ったその時。

「うおっ！？」

机から９０度右に向きを変え、椅子から立ち上がろうとして、拓海は思わず再び椅子に勢いよく座り込んでしまった。

正面にある白いクローゼットに、見覚えのない能面。

何度も瞬きをするが、やはりそれはそこにある。なんど瞬きしても、黒い輪郭がくっきりと目に飛び込んでくる。

すっかり色を失った顔で拓海は恐る恐る立ち上がり、そこで、ようやく気が付いた。

「・・・なんだよぉ・・・！」

脱力し、三度椅子に腰を下ろす。背もたれに、ぐでん、と寄りかかって、再び自分を恥じた。

能面はクローゼットにかかっていたのではない。拓海の目に焼き付いていたのだ。

先ほどのトリックが分からなかった画像は、見た者の目に、ちょうどカメラのフラッシュ撮影の後、暫く目に残る黒いもやもやと同じ原理で、フラッシュ残像を残すためのものだったらしい。

今回は彰二に文句を言うわけにもいくまい。自分の好きなトリックアートで、勝手に驚いたのだから。大きく息を吐いて、電気を消すと拓海は布団にもぐった。

2時間後、寝つけずに拓海は、キッチンで水を飲んでいた。熱帯夜であることもあるが、先ほどの能面が未だ彼のまぶたの裏に張り付いているのだ。他の何かだったら別なのだろうが、なにしろ薄笑いを浮かべたおかめの能面がこちらを向いているのだから、現代人にとっては気味が悪いことこの上ない。

（残像ってこんなに残るもんだったか・・・？気持ち悪いな・・・）

トイレに入って、能面の残像を消そうと蛍光灯をガン見したりもしてみたが、おかめは強かった。まったくの無傷で、不敵に笑っている。ただ、目が痛くなっただけだった。

諦めて再び布団にもぐる。もちろん眠れるはずもなく、能面とただ向き合うだけの時間が過ぎていく。
おかめが去って行ったのは、外がすっかり明るくなってからのことだった。

「おー、おはようタク・・・あれ、タク、なんか・・・痩せた？」
「一日で痩せる奴がいるかよ・・・」
教室で彰二に声をかけられ、拓海は鞄を置くと机に突っ伏した。眠い。とにかく、眠い。
「なんだよ、もしかしてあのホラーページ怖くて眠れなかったとか？」
「あんなちゃっちぃので眠れなくなるわけないだろ？安眠妨害は、その後のトリックアート。」
「え、だまし絵スレの事？」
「あの残像の奴だよ。送ってきたってことは、お前も見たんだろう？」
少しだけ顔を上げて彰二を見ながら言う。結局能面が消えてからも、外の鳥の鳴き声やらセミの鳴き声やらが五月蝿くてほとんど眠れなかった。
しかし、聞かれた彰二は首をかしげる。それから少し考えて、こう言った。
「残像って、あれだろ、ひょっとこのやつ。あんなのの何が安眠妨害になるんだよ。」

「・・・ひょっとこ？」
「あれだろ？点見つめてたら残像残るやつ。」
頷くと、脇から他の男友達も話に参加してきた。彼もまた、残像はひょっとこだったという。
「・・・俺見えたの、ひょっとこじゃなかったんだけど・・・？」
「え？なんだったの？」
「能面。おかめの。」
「あの、納豆に描いてあるやつ？」
「そう、それ。」
ちょっと気持ち悪く思いながら言うと、彰二の目が輝いた。予想外の反応に、拓海は眠気も忘れ、きょとん、とした視線を送る。
「お前！うらやましい！それ多分レアだぜ！！あの画像細工してあったのな！うわあいいなあ！」
がっちり肩を掴まれ、身動きが取れない。拓海は近づいてくる彰二の顔から自らの顔をそむけ、とりあえず説明しろよ！と声を張り上げた。
「お、おお、悪い。つい興奮して。」
彰二曰く、携帯待ち受けに良く見られる、画像がランダムに表示されるフラッシュ画像と同じ原理で、画像自体にランダム表示の機能が付いた画像が、拓海の見た画像なのだそうだ。つまり、普通は見られない画像を、拓海は見た、と、そういうことを言いたいらしい。画像採集が大好きな彰二にとって、それは羨ましい事この上ない事態だという。

「いいなあ、俺、それ見られるなら安眠妨害されてもいいわ・・・」
「悪趣味・・・。」

しかし、閲覧者を驚かせるにはやけに手の込んだ画像だよな、と、拓海は続けた。何で、と聞き返した彰二。拓海は昨夜苦しめられた能面の顔を思い出しながら言った。

「だって、あれ四、五時間消えねえぞ・・・？残像ってあんなに長く残るもんじゃねーだろ、普通。」
「マジで・・・？っつーか、画像に細工したくらいでそんな、生物学無視したような事ができんのかね？」
「・・・俺に聞かれても。」

確かに、残像にしては長く残りすぎだった。もしや、拓海の精神状態が悪すぎて、幻覚でも見たのだろうか。もしくは、夢だった、とか。何であれ今となっては確かめようもない。拓海はため息を零して、ふと黒板に目をやった。そして、掲示物を見て飛びあがる。

「え・・・今日クラス写真撮影！？」
「今更かよ。女子見て気付かなかったのか？」

彰二に言われて教室中を見渡せば、確かに、女子の大半が気合いを入れて髪の毛を巻いて来ている。ゆるふわ、というのか、よくみると、学校が黙認する程度をきちんとわきまえて化粧もきっちりしているのがわかった。

「うそだろ・・・俺寝癖やべえんだけど・・・」
「直すんなら手伝うけど？」
「え、マジ！？」

「・・・代わりに、まろんちゃんのエロ画像スレ、探して教えてくれよな。」

仕方ない手を打とう。そう言って拓海は彰二を連れ、男子トイレへと向かった。

朝のホームルームが始まる頃には、能面のことなど完全に忘れてしまっていた。

校長の話、夏休みの心得、生活指導部の説教、全て睡眠時間に回して終業式終了。高校生活で一番鍛えられたスキルは『立ち寝』だと自負している拓海は、うーん、と体を伸ばした。

「俺ら撮影何番目？」

「三年の後すぐだから、九番目かな。」

しっかりセットされた髪の毛を少しだけ指でいじり、拓海は彰二の脇に腰を下ろした。三年生は卒業アルバム用に気合を入れて撮影に臨んでいるが、二年生にしてみればその分待ち時間がのびて迷惑なだけである。

携帯電話をいじっていた彰二が、うーん、と、声を発した。拓海にディスプレイを向け、頭を抱える。

「お前、見たのこの画像？」

拓海は画面を見て、顔をしかめた。頷いて、息を吐く。

「間違いない、これだよ。おかめ。」

「嘘だろお・・・じゃあ、俺の目がおかしいのかなあ・・・」

昨日散々悩まされた能面を生みだした画像。拓海はあまり凝視しないうちに顔をそむけた。別にビビる訳ではないが、特に進んでまた見たいとも思わない。

彰二は首をかしげ、様々な角度から何度もそれを見返している。不思議に思い、拓海は彰二に声をかけた。

「・・・それさ、お前には、ひょっとこに見えるの？」

「ん？おう。」

「・・・ちゃんとしたひょっとこ？」

「割とちゃんとしてるぞ。ひょっとこっぽい何か、って感じじゃねえな。」

おかしい。拓海は彰二から携帯電話をひったくった。

「あ、おい。」

じっと、中央の点を見つめる。五秒、十秒・・・目を離す。体育館の白い壁を見る。

「・・・目がおかしいのは、俺かもしれない。」

拓海は呟いて、視線はそのままに彰二に携帯電話を返した。壁を凝視したまま固まる拓海に、彰二は再び画面を凝視し、壁に目をやる。

「・・・俺にはひょっとこにみえるけど・・・じゃあ、お前には？」

「・・・おかめにしか見えないな。」

白い壁に浮かびあがり、おかめの顔はうすら笑いを浮かべてやはり

拓海を凝視していた。
こうなると、彰二も気味が悪くなってくる。フォルダから画像を削除して、携帯電話を閉じた。

「あ、でも今度はすぐ消えたわ。もう見えない。」

拓海が振り返ったのを確認し、彰二は複雑な表情で拓海を見つめる。

「お前、俺の事脅かし返そうとして変な演技してんじゃねえの？」
「そこまで俺器小さくねえよ。」
「そうかなあ。」

いたずらはしまくってるし、そろそろ仕返しはされてもいい頃だ、と、彰二は覚悟している。それに拓海は、少なくとも彰二より悪賢い演技派だ。騙されてもなんらおかしくはない。更に言えば、ひょっとこがおかめに見える人間など居るはずはない。そんなのがいたら能や狂言やってる人たちは商売あがったりじゃないか。
拓海は拓海で、彰二のいたずらだ、と、思う事にした。彰二がいたずらを仕掛けてくるのはいつもの事だし、ここで策略通り怖がってしまえば、昨夜の二の舞である。

「まあいいや、順番、次だって。」
「おう。じゃあ行こうぜ。」

お互いに納得して、二人同時に腰を上げる。
そう、二人とも、相手のいたずらだ、と、そう、思っていた。

「はい、笑ってー。ああ、そこ、笑いすぎね。ははっ、はい、いいよー。撮るからねー！」

・・・今、この瞬間までは・・・

カシャッ

「・・・ショウ・・・。」

「あ？」

撮影が終わった後、拓海は正面を見つめたまま硬直していた。声をかけられ、彰二は拓海の顔を覗き込む。

「なんだよ。次の邪魔になるだろ。」

「・・・おかめに見える。」

「はあ？いつまでそんな話引きずってんだよ、おら、行くぞ。」

半ば拓海を引きずって、彰二は体育館の出口へ向かう。拓海は暫く壁を凝視していたが、ふと我に返ったように、悪い、と、声を発して自ら歩き出した。

「どうしたんだ、お前、なんか変だぞ？」

尋ねられ、拓海は何かを考える素振りを見せる。そして、ふっ、と笑いを零して、こう言った。

「・・・さあ、俺、寝ぼけてんだろ。」

それから家に帰るまで、拓海になんら変わったところは見られなかった。彰二も拓海のほぼ徹夜状態なのを思い出して納得し、特にそれ以上何もつっこんだりはしなかった。

・・・しかし、その一週間後、拓海は死んだ。心臓麻痺だった。

あまりに突然の訃報で、クラスメイトは皆、葬儀でも信じられない、と、いった表情を浮かべて、ぽかん、と座っていた。
彰二も、その一人だった。心臓麻痺という死因から、それが突然のものであろう事は推測できたが、それでも、何故だ、という思いが頭の中を廻った。死にそうな事はなんにも言っていなかった。なのにどうして、と。
しかし、家族に話を聞いて、彰二は愕然とした。母親曰く、拓海はあの終業式の日、家に帰ってからは抜け殻のようになって、ずっと呆けていたと言う。そしてこの一週間、時折何か奇声を上げて暴れまわっては、うずくまる事を繰り返していたそうだ。

「・・・これで、幸せだったのかもしれません。あの子はきっと、ようやく解放されたんです。」

涙声で、母親はそう言った。拓海の姉が母親の肩を抱え、一礼して奥へと去って行った。拓海と一番の仲良しだと自負している彰二は、会食の席に残った父親に、お悔やみの言葉を、と、頭を下げ、近づいて行った。

「彰二君か。君は気丈な子だね。・・・涙一つ見せない。」
「・・・いえ、あの・・・実感がなくて。」
「・・・そうか。そうだね、君は、あれのおかしくなったのを見ていないから。」

おかしくなった、という言葉に、何故か背筋が寒くなった。具体的に聞いた母親の話では、狂気こそあれ、恐怖など感じなかったというのに。

「奇声って・・・どんなのだったんですか・・・？」

体中が危険信号を発しているのに、彰二は思わず、父親に尋ねてしまった。それから、はっとして、済みません、不謹慎な事を、と、深く頭を下げる。

「いや、いいんだ。息子と仲良くしてもらってた君が息子について聞いてくれるのは、父親として嬉しい事だからね。」

にこ、と、笑顔が痛い。彰二は俯いて、その笑顔を見る事を拒絶してしまった。今目の前で涙を流される方が、こんな表情を見るよりよっぽどましだ、と、唇をかむ。

「拓海は、追い回されていたようだった。酷く怯えて私たち家族に縋りついたりしてね。クスリでもやったのかと検査してもらったが、そうじゃなかった。」
「・・・じゃあ、どうして・・・？」
「さあ。・・・最後まで、わからなかったよ。ああ、ただ・・・」
「ただ？」

・・・次の瞬間に発せられた言葉に、彰二は全身の血が冷めていくのを感じた。
思わず、嘘だ、と呟いて、自分の携帯電話のフォルダを開き、中にある一枚の画像を眺める。

「なんで・・・お前はそこにいるんだ・・・？」

会場の視線が集まる中、呟いた彰二は静かに画面を閉じた。それから口元に気味の悪い笑みを浮かべて、ふらふらと会場をあとにする。
・・・後に拓海の両親は、その彰二の行動は、死に際の拓海にそっくりだった、と語った。

彰二は、以来完全に姿をくらました。誰ひとり、彼の姿を見たものは居ないと言う。死んだのか、それとも未だに苦しみ続けているのか、それは定かではない。
ただ一つ、わかっていることは、二人が見ていたあの画像は、今でもどこかに存在しているという事だ。
楽しいひょっとこのだまし絵の皮をかぶって・・・今もどこかに。

「ただ、拓海はいつも叫んでいたね。おかめ、能面、来るな、来る

な・・・とね。」

**（後書き）**

※この作品はフィクションです。実在するサイト様、画像様とは全く関係ありません。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6694v/

トリックアート

2011年10月7日01時57分発行